

第3回 BAYANIHAN～みんなで地域をつくっていこう～ 運営委員会（報告）

令和4年3月8日（火）15:00~17:00

1. 開会（15:00）

2. 議題（15:05）

- ・本事業ご報告（事務局から）

- ・事業評価

高貝 今回実習を受け入れた静岡文化芸術大学の日本語教員養成課程は前からあったのか。
半場 以前からあった。従来は学内の留学生相手に日本語教育実習をしていたが、現在コロナで実習ができないので、先生方も学生の実習先の選定に苦慮しているようだ。ナガイサに実習に来た学生の中には多文化共生を専攻している学生もいれば、日本語教育畑ではない学生もいて、ユニークだった。

吉開 「つなひろ」の活用や大学生の実習受け入れなど、活動の広がりには驚くばかりで感心する。今後、公認日本語教師制度が運用されるようになった時に、類型地域においてはフィリピンナガイサが実習生を受け入れて実施した事例のようになると思うので、このノウハウは生きてくるのではないかな。これをもっと飛躍させるために、半場さんだけでなく運営面を担う人材が必要になると思う。こうした活動をしている同程度の実力を持った国内の他の団体と連携して、国の体制づくりにも参画していくということを期待したい。

村松正利 「つなひろ」のテーマが28ぐらいあったが、ナガイサの中で優先順位はつけているのか。今後、地域に即した内容に応用アレンジするということもぜひお願いしたい。

半場 ナガイサのやりたいこと、やらなければならないことは、リスト化こそできていないが、防災、生活情報、保障関係など、経験と感覚でスタッフが把握している。今後は「つなひろ」を取り入れて、これらの内容に厚みを持たせていきたい。「つなひろ」に関しては、年度の始め、このようにたくさん教材として取り入れることを想定していなかった。しかし、やっていくうちに周りからの反響が大きくなって、驚いている。国の資料を見ると、「つなひろ」の動画拡充に予算がつけられているので、現場の声をしっかり挙げていきたいと考えている。なお、アンケートを通して、すでにハローワークでの場面についてのコンテンツ希望を伝えている。ハローワーク職員との意思疎通の難しさは、皆がすごく心を痛めている。双方の声に耳を傾けるとどちらも「日本語ができないから」ということを言うのだが、少なくともフィリピンナガイサでは日本語を使って意思疎通が成立することを考えると、どうして教室の外へ出るとこのようなことになってしまうのだろうかという疑問に思う。本当に日本語だけの問題なのか、外国人側の努力も大事だが、日本社会側にも意識変革を促さなければならない場面やトピックはまだあるのだと思う。日本語教育の推進に関する法律関連の書類では、その法律の基本理念に「国内における日本語教育が地域の活力

向上に寄与するものであるという認識の下行われること」というのが赤く、太字で書かれている。例えば、前回の本委員会で挙げた浜北でのケーキ屋さんの話など、地域が元気になるような、お楽しみの・交流活動的なものもいいと思う。

村松辰芳 この委員会に出席するたびにナガイサの活動の活躍に感心している。コロナ後の社会がどうなるのか非常に興味を持っている。浜北は浜松の中心部とはまた違ったのどかな雰囲気の社会、そして同時に国際色が豊かであるというということがアピールできればと思っている。ナガイサと引き続き連携して地域を活性化する取り組みをしていきたい。

松本 外国人が、日本語というフィルターだけでなく、母国で得てきた知識や経験で判断されるような世界になっていけば、もっと多文化共生社会は進んでいくはずだと思っている。ただ、ハローワークなどまだまだ旧態依然だと感じる日本社会の仕組みが多いとも日々実感している。こういうところがもっと変わっていけば、外国人市民の地域での活躍、共生はどんどん進むはずである。

エバ 「つなひろ」の教材は、日常生活に本当に必要な言葉、生活の情報がたくさんあって、とてもいいと思う。また「つなひろ」を使ったナガイサの活動、例えば図書館の回では、実際に図書館でカードを作った成功体験で、みんな自信が付いた。コロナで人との関わり合いが減って、日本語でおしゃべりする機会も減る中で、話したいけど自信がないという外国人の気持ちを押してくれる活動だったと思う。

鈴木 大学生の実習生受け入れについて。近い将来の日本語講師の国家資格化を担っていく若い世代の支援について、市も取り組んでいかなければと思っている。ただ現在は留学生の入国が滞っている状態でミスマッチがあるので、ナガイサのようなところが実習生を受け入れしてくれたことはありがたい。新年度（R4）の浜松市の取り組みとしては、地域の日本語政策にかかわるアクションプランの策定、外国人市民の日本語能力を客観的に評価、判定すること。さらに、企業との連携、外国人材を活用している事業所認定制度をさらに進めていきたい。日本人市民、企業など受け入れ側の意識変革が必要だと捉えている。

鈴木市長を中心に市が取り組もうとしているのは、スモールビジネスを含めたスタートアップ（新規企業立ち上げ）への支援であり、そこに外国人の強みを加えていけないかということである。外国人の能力を日本語だけで判断しないで、外国人材の多様な文化ツールやノウハウをどう引き出していくのか、そしてそれをビジネスにつなげていく方法を考えていきたい。多様性を脅威としてではなく地域の活力に結び付けていくことは、浜松市が加盟しているインターカルチュラルシティのあり方にも即したものである。ナガイサの立ち位置は非常に重要で頼りにしている。企業社会をどんどん巻き込んでいきたいと思っている。

高貝 浜松市も静岡県も多文化共生に理解が厚く、行政が先頭に立っている点が非常にありがたいことだと感じる。以上を持って、事務局へ返す。

3. その他（16:40）

4. 閉会（16:50）